

5～7 歳児を対象とした英語教室の試み

三 木 徹

I. 平成 13 年度大谷女子大学英語英米文学科公開講座

平成 13 年度（2001 年度）大谷女子大学英語英米文学科主催の公開講座は早期英語教育をテーマとし、平成 13 年（2001 年）11 月 17 日（土）、18 日（日）の両日、大谷女子大学を会場として開催された。両日のスケジュール、講師と講義題目は次の通りである⁽¹⁾。

11 月 17 日 (土)	児童英語教育に関する 3 つのレクチャー
9:30～11:30	「小学校教師のための英語発音訓練——可能性をめざして」 大谷女子大学英語英米文学科教授 高村博正（博物館 201 教室）
12:30～14:30	「早期英語教育の意義と指導方法」 児童英語インストラクター 松村由利子（博物館 201 教室）
14:50～16:50	「小学校における英語教育の実践例」 河内長野市立天野小学校教諭 梅本 多（博物館 201 教室）

11 月 18 日 (日)	ワークショップ（成人対象）と英語教室（児童対象）		
10:00～16:30 (12:00～13:00 は昼休み)	ワークショップ 「発音クリニック」 【成人対象】 大谷女子大学英語英米 文学科 教授 高村博正 (LL 教室)	11:00～ 12:00	英語教室「英語で遊ぼう(A)」 【児童対象】 大谷女子大学英語英米文学科 助教授 三木 徹 (ウェルネス・センター)
		14:00～ 15:00	英語教室「英語で遊ぼう(B)」 【児童対象】 (ウェルネス・センター)

(2)

初日は教師のための発音自己訓練方法の紹介、効果的な指導方法と指導上の留意点についての講義、および、小学校での「英語活動」の実践報告であり、2日目は成人対象の発音自己訓練のワークショップと児童対象の英語教室「英語で遊ぼう」という講義と実践の2部構成をとった。筆者が担当した2日目の英語教室「英語で遊ぼう」の概要は以下の通りである。

- ・ 時間：午前の部 11:00～12:00 午後の部 14:00～15:00
- ・ 人数：各クラス 30 名程度
- ・ 対象：5 歳から 7 歳の英語に初めて触れる児童
- ・ 目的：小学校での「英語活動」への導入とし、英語という言葉への興味と関心を持たせる。
- ・ 留意点：音声中心の活動
 - コミュニケーション活動に重点
 - 身近な題材を英語で表現する。
 - ゲーム、歌、ダンスを活用し、身体活動を通じた言語習得を目指す。
 - 家庭でも保護者と児童が楽しめる指導方法を提示する。

また、スケジュール表では英語教室「英語で遊ぼう」が A と B の 2 種類に分かれているが、これは午前の部と午後の部を示すだけの記号であり、内容は同一のものである。

本稿の以下の章では、小学校における児童対象の英語活動の実践例に触れると共に、筆者が担当した児童対象英語教室の詳細な内容と児童の保護者からの反応を紹介し、早期英語教育における効果的な指導法のあり方と今後の展望と計画を述べてみたい⁽²⁾。

Ⅱ. 小学校における英語活動の実践例 ー河内長野市立天野小学校の場合

平成14年度(2002年度)より全面実施された新学習指導要領においては、小学校の第3学年から「総合的な学習の時間」が新設されている。この「総合的な学習の時間」の学習活動の一例として「国際理解」が挙げられており、小学校でも、国際理解に関する学習の一環として外国語会話を行うことが可能となった。文部科学省作成の『小学校英語活動実践の手引』は、小学校における「英語活動」のねらいを次のように述べている⁽³⁾。

児童期は、新たな事象に対する興味・関心が強く、言語をはじめとして、異文化に関しても自然に受け入れられる時期にある。このような時期に英語に触れることは、コミュニケーション能力を育てる上でも、国際理解を深める上でも大変重要な体験になる。「英語活動」そのものが異文化に触れる体験となり、さらに、外国の人や文化にかかわろうとする時の手段として、英語を活用しようとする態度を育成することにもつながる。すなわち、言語習得を主な目的とするのではなく、興味・関心や意欲の育成をねらうことが重要である。(p. 3.)

ここでは、英語という言葉とその背景にある文化に対する興味・関心の育成を「英語活動」を通して行う点が特に強調されている。こうした「英語活動」のねらいが小学校の教育現場における実践の中でいかに活かされていくかが今後の大きな課題となっていくであろう。この章では、他校に先駆けて「英語活動」に取り組んできた河内長野市立天野小学校の実践例(特に低学年)を参考とし、「興味・関心や意欲の育成」の具体例として検討してみたい。

河内長野市立天野小学校は平成8年度(1996年度)より文部省(現文部科学省)の研究開発校として「英語活動」の研究実践に取り組んでおり、この分

(4)

野においては多大な成果を残している小学校である。新学習指導要領の「総合的な学習の時間」に従えば「英語活動」の導入は3年生からとなるが、天野小学校では小学校1年生から系統的なカリキュラムを作成し、教科「英語」として教育課程の中に位置づけて研究を続けている点も注目に値しよう。天野小学校編集の『教科「英語」と国際理解教育』によれば、低学年では1週当たり45分の授業を30分と15分に分け、週2回英語に触れる機会を持てるように工夫している(pp. 42-43.)。また、授業形態も、学級担任、外国人英語教員、日本人英語担当教員の3者が指導に当たる時間、学級担任と日本人英語担当教員の2者が担当する時間、学級担任のみが指導する時間と3通りに分け、中高学年では交流活動の準備時間として学級担任と日本人英語担当教員による時間を充てるなどして効果的な「英語活動」を行っている(『教科「英語」と国際理解教育』p. 42.)。

本稿では、英語教室「英語で遊ぼう」が英語に初めて触れる5~7歳児を対象としている点から、天野小学校における低学年の指導例を取り上げるが、低学年を指導する際の留意点について、『教科「英語」と国際理解教育』は次のように述べている。

低学年を指導するにあたって特に留意していることは、英語を聞き慣れることに重点を置き、無理に話させないようにしていることである。繰り返す教師の後に続いて単語を言うことも必要だが、題材とピッタリ合った歌を歌いながら体を動かして遊んだり、目標とする単語や会話を入れたチャントで楽しく言ったりすることの方が低学年には適している。(p. 26.)

また、低学年の「英語活動」において取り上げる題材としては、次のような具体例が示されている。

低学年の題材としては、子供がごく身近に感じるもの(体、動物、乗り物、遊び、学校、服装、家族)や、生活科と内容的に関連があるもの(お

店屋さんごっこ、おまつり)、異文化(お祭り)に触れるもの(ハロウィーン、クリスマス)、普通の英語学習でよく使うもの(あいさつ、色、数字)、お話を聞くことをとりあげている。(p. 26.)

低学年を指導する際に重要な点とは、まず、英語の input を十分に与えること、身体活動と言語活動とを密接に関連づけることの2点であろう。入門期の児童に自発的な英語の発話を要求し、これを強制することは心理的に大きな負担となり、かえって英語嫌いを生み出す結果となる。また、題材としては、児童にとって分かりやすいもの、遊びの感覚で受け入れられるものが、入門期の導入には不可欠である。

こうした留意点を踏まえた上での具体的な天野小学校の指導例を次に挙げるが、これは、小学校第1学年対象の15分間の「英語活動」の展開例である。

過程	活動内容
1. あいさつ (2分)	<p>★元気よくあいさつをしよう。</p> <p>Teacher: Good morning! How are you?</p> <p>Students: I'm fine, thank you. And you?</p> <p>Teacher: How's the weather today?</p> <p>Students: It's sunny today!</p>
2. ダンスをする。 (4分)	<p>★'The Hokey Pokey'の音楽に合わせて楽しくダンスをしよう。</p> <p>Teacher: Let's enjoy dancing. Are you ready?</p> <p>Students: Yes!</p>
3. ゲームをする。 (5分)	<p>★ツイスターゲームをしよう。</p> <p>♪Boom Chick-a-boomのリズムに合わせてゲームを</p>

(6)

する。

Teacher : Right hand. Touch red!

Students : Right hand!

4. 歌を歌う。 ★'Head and Shoulders' を体を動かしながら歌おう。
(3分) ♪体の部分の言い方をリズムに合わせて英語で復習する。

Teacher : Head.

Students : Head.

5. あいさつをする。★あいさつをしよう。
(1分) ♪Good-bye Song を歌う。

(『教科「英語」と国際理解教育』p. 75.)

15分間という短い時間の中で、「あいさつ」→「ダンス」→「ゲーム」→「歌」→「あいさつ」と展開していくわけであるが、最初の「あいさつ」以外は、すべて身体活動（歌も含む）を伴う言語活動から構成されており、題材も体の部位と色という児童に理解しやすい内容となっている。また、遊びの感覚を活動に取り入れ、児童が飽きないような「英語活動」の工夫がなされているとも言えるだろう。

英語教室「英語で遊ぼう」の指導案の作成においても、この天野小学校の指導事例と同様、ゲーム、歌、ダンスといった遊び感覚に重点を置いた活動を取り入れてみた。また、「英語で遊ぼう」では、家庭でも簡単に利用できるゲームも取り入れ、その実例の提案も考慮している。次の章では、「英語で遊ぼう」の展開を具体的に示し、それぞれの活動の目的について述べていきたい。

Ⅲ. 英語教室「英語で遊ぼう」の実践例

第1章で述べたように、「英語で遊ぼう」は5～7歳の児童を対象とした約1時間の英語教室である。対象児童は、その年齢からも分かるように、小学校第1学年から第2学年、もしくは、小学校就学前の段階である。英語という言葉をもっと学習していないという前提条件のもとに指導案を作成し、この英語教室で実践に移したわけであるが、すでに幼稚園や市内の英語教室、英語塾等である程度の英語を習得している児童も見受けられた。以下、展開に沿って解説していく。

1. 英語教室開講前のあいさつ (写真1)

写真1は英語教室開講前の講師とアシスタント学生の挨拶の場面である。教室会場前での受付時に、児童の氏名を確認し、ローマ字で名前を書いた名札(首からぶら下げる形)を渡している。児童の名前を常に把握しておくことは以下の活動を円滑に行うためにも必要不可欠であるが、名札を渡す際に、アシスタント学生が簡単な英語(‘Hi’, ‘How are you?’等)で参加児童に声をかけていた点も英語教室の雰囲気作りの上で重要であろう。写真1では、参加児童に指導者の側が自己紹介するわけであるが、この時も英語を使用する。(指



写真1

(8)

導者側も名札を身に着けている。) その後、教室での注意事項と約束事(右手を上げたら集合する等)を児童との間で確認していくわけである。

2. Warm-up (写真2)

英語教室の最初は、楽しい雰囲気作りと Warm-up も兼ねて “Head, Shoulders, Knees and Toes”⁽⁴⁾ から始めた。この歌は歌詞に沿って頭、肩、膝、つま先という順に両手で身体の各部位を触れていくという極めてシンプルな内容であるが、次第にスピードを上げていくことで、児童の興味を引きつけることが可能であり、自分の体の部位という最も身近な題材を英語で表現する練習にもなる。導入としては、まず、歌を使わず、指導者が頭、肩、膝、つま先といった順に英語の単語を言いながらゆっくりと自らの体を触れていく。その際に、児童も真似をしながら自分の体を触れていくが、この時、児童は英語の単語を口に出す必要はない。続いて、歌に合わせて何回か繰り返し体に触れていくわけだが、この繰り返しの中で、児童は自然と英語の単語を発声していくようになる。



写真2

3. 挨拶 (写真3)

英語に限らず、言葉による対人コミュニケーション活動の基本は挨拶であろう。簡単なふたつの言葉、‘Hi’ と ‘Bye’ がこの活動で使用するすべての単語で



写真3

ある。参加児童とアシスタント学生、および、参加児童同士が打ち解けられるよう、5～6名のグループで輪になり、隣の者に順番に‘Hi’と‘Bye’を言っていく。この活動で大切な点とは、‘Hi’と言われたら、必ず‘Hi’と挨拶を返すことである。(‘Bye’も同様) また、‘Hi’と‘Bye’を言う際には、大きく手を振るように注意したい。言語活動と身体活動を一致させることで、言語習得がより容易になっていくのではないだろうか。この活動は日常生活の中でも簡単に行えるものでもある。

4. 名前を言う。名前を尋ねる。(写真4)

写真4は自分の名前を言い、相手の名前を尋ねる時の表現の導入である。ここでは、児童がよく知っているテレビアニメのキャラクター人形を利用して、導入する表現は以下の通りである。

‘Hi. My name is ____.’

‘What’s your name?’

‘Nice to see you.’

‘Bye.’

3の段階で‘Hi’、‘Bye’という表現は導入済みであり、ここではその表現をさら



写真 4

に発展させた形、すなわち、挨拶の後、自らの名前を言い、相手の名前を尋ね、もうひとつの重要な挨拶表現である ‘Nice to see you.’ までを導入した。挨拶という対人コミュニケーションの基本の上に、名前という個人情報の交換という言語活動が加わるわけである。また、‘Nice to see you.’ というやや複雑な表現をここで導入することで、英語の挨拶表現という言語材料へのさらなる興味と関心を持たせたい。4の段階は、指導者とアシスタント学生、もしくは、アシスタント学生同士によるモデルの提示が基本であるが、最初に児童に人気のあるテレビアニメのキャラクター同士の会話という形をとり、その次に、そのキャラクターと児童との対話（写真4）というように発展させていった。

5. 4の表現を使ったゲーム（写真5）

写真5は4の段階で導入した表現を練習するためのゲームである。このゲームでは、児童を5つのグループに分け、それぞれのグループを一列に並ばせる。列の先頭の児童から順番にアシスタント学生のところへ挨拶に走っていき、4で導入した表現を使ってアシスタント学生と会話を行う。アシスタント学生との会話を終えた児童は自分の列へ走って戻り、次の児童の手にタッチ、タッチされた児童が次にアシスタント学生のところへ走っていく。これを順繰りに行き、どのグループが一番早いかを競うかけっこゲームである。かけっこが目的ではなく、英語表現の練習とその定着が目的であるので、順位について



写真 5

は問わず、'Very good. Everyone is No. 1.' と言ってこのゲームは終了した。

6. 神経衰弱 (写真 6)

5 のかけっこゲームのように激しく身体をつかうゲームだけではなく、座って楽しめるゲームも取り入れてみた。写真 6 はそうしたゲームのひとつ神経衰弱である。果物の絵を描いた紙を、それぞれの果物につき 2 枚ずつ用意する。その紙を裏返して置き、児童が順番に 2 枚ずつめくっていく。同じ果物が描いてある紙をめくった児童は、その果物の名前を英語で言うといったゲームである。このゲームの目的は身近にあるもの（ここでは果物）の名前を英語で表現することにある。ゲームの開始に先立って、まず、紙に描いた果物 (or-



写真 6

(12)

ange, apple, banana 等) を見せ、その果物の名前を英語で繰り返す。次に、その果物のシルエットを描いた紙を見せて、児童の応答を待つという手順で導入したが、シルエットを見せる段階でほとんどの児童が英語で果物の名前を答えていた。

7. 福笑い (写真7)

写真7も座って行えるゲームのひとつ、福笑いである。2の Warm-up の段階で身体や顔の部位を表す単語は導入済みであるが、ここではそうした単語の練習と定着を目的としている。顔の輪郭だけを描いた紙と、目、鼻、口、耳を描いた小さい紙を用意する。児童は順番に目隠しをし、講師が英語で言った顔の部分の紙を紙の上に置いていく。このゲームの導入では、大きな紙に描いた顔の絵の上に、目、鼻、耳、口を置きながらその単語を全員で繰り返して発声するという形をとってみた。このゲームも児童の反応が非常に良かったことをつけ加えておきたい。



写真7

8. ダンス (写真8)

英語教室の締めくくりは全員で踊る “The Hokey-Pokey”⁽⁶⁾ というダンスである。このダンスの特徴は、手、足、肩、腰、頭といった身体の各部位を表す単語と ‘put in’, ‘put out’, ‘shake’, ‘turn around’ という動作を表す表現とが組み合わさっている点にある。最初はアシスタント学生全員がお手本を示し、そ



写真 8

の後、歌に合わせて全員で輪になって踊ったわけであるが、参加児童同士、参加児童とアシスタント学生同士が打ち解けて楽しい雰囲気の中で英語教室を締めくくることができた。教室終了後、会場から帰る児童が自ら進んで‘Bye’とアシスタント学生に声をかけているのが印象的であった。

IV. 参加者（保護者）の反応

平成 13 年度公開講座「英語で遊ぼう」に参加した児童は、午前の部が 27 名（25 家族）、午後の部が 29 名（25 家族）であった。英語教室終了後、参加児童の保護者の方々にアンケート用紙への記入をお願いしたが、その回答数は午前の部が 23、午後の部が 25 である。アンケート項目は、公開講座を知った媒体、今後希望する英語教室の内容、希望する開催曜日と時間帯、希望する開催場所であるが、その中のひとつ、「今後、どのような内容の児童英語教室をご希望になりますか？」に対する保護者の回答は午前、午後を合わせて次の通りである。

- ① 英語の歌やダンスを中心にした教室 41 名
- ② 本を読んだり聞いたりする活動を中心とした教室 7 名
- ③ お芝居やドラマを取り入れた教室 10 名

(14)

- ④ 英語を書くことを中心とした教室 0名
- ⑤ ゲーム活動を中心とした教室 37名
- ⑥ 国際理解を中心とした教室 9名 (複数回答可)

この結果からも明らかなように、年少期の児童の保護者が求める英語教室は、歌、ダンス、ゲームを中心とした遊びながら英語という言葉に触れることができる内容のものである。ある程度、年長の児童になれば英語の文字にも興味を示すし、指導する側も英語を読み、書くといった言語活動の導入も考慮に入れなくてはならないであろうが、年少の段階では保護者は楽しく英語を学べる環境を第1に考えている。これは、保護者の世代が受けた読み書き中心の英語教育に対する不満の表れでもあろう。また、歌やゲームを活用した初期の段階での言語活動によって喚起された興味や関心をいかに持続させていけばよいのかもこれから考えていかねばならない問題である。

V. 今後の展望と計画

5歳から7歳という年少の児童を対象とした英語教室の場合、ダンス、歌、ゲームが中心となるのは当然のことではある。しかし、年1回1時間弱という時間的制限の中では、ひとつの言語活動と他の言語活動との連結や有機的な流れを捉えた授業プランを組み立てることは不可能と言ってもよい。児童を対象にした英語教室の場合、言語材料を繰り返してさまざまな形で提示しての練習が表現の定着を図るうえで重要である。また、年少の児童の場合、教室の雰囲気になじむだけでもかなりの時間を要する。単発の教室では、その場では楽しい雰囲気でも終了したとしても、各児童の定着度を知ることは不可能である。多彩な言語活動を取り入れて英語の input の量を増やし、コミュニケーション能力の向上を図りつつ、英語という言葉への興味と関心を育成するには、かなりの時間を要する。Moon (p. 10.) は児童に英語を教える際に考慮しなければならない点を次のように挙げている。

- ・ create a real need and desire to use English
- ・ provide sufficient time for English
- ・ provide exposure to varied and meaningful input with a focus on communication
- ・ provide opportunities for children to experiment with their new language
- ・ provide plenty of opportunities to practice and use the language in different contexts
- ・ create a friendly atmosphere in which children can take risks and enjoy their learning
- ・ provide feedback on learning
- ・ help children notice the underlying pattern in language.

この8つの要点をすべて満たすには、単発の企画ではなく、少なくとも数回連続した英語教室を開講する必要があるだろう。20～30名の児童が4回から5回連続して参加できる英語教室の開講を今後の課題として考えていきたい。

注

- (1) 各講師の肩書きと所属は平成13年度(2001年度)のものである。
- (2) 英語教室「英語で遊ぼう」の指導案作成過程については、本稿の先行論文 三木徹(2002)「授業指導案作成を通じた児童英語指導者育成の試み」大谷女子大学紀要第36号、pp. 20-35. を参照されたい。
- (3) 『小学校英語活動実践の手引』では「総合的な学習の時間」で扱う英会話を「英語活動」と呼んでいる。本稿においても、小学校での英語授業は「英語活動」という呼称で統一する。文部科学省(2001)『小学校英語活動実践の手引』pp. 2-3. 参照
- (4) 永井淳子・粕谷恭子(著)、久埜百合(監修)(2000)「うたって遊ぼう 小学生の英語の歌」東京：小学館、pp. 8-9. 歌の歌詞は次の通りである。

Head, shoulders, knees and toes, knees and toes,
 Head, shoulders, knees and toes, knees and toes,
 And eyes and ears and mouth and noses,

Head, shoulders, knees and toes, knees and toes.

- (5) Pamela Conn Beall & Susan Hagen Nipp (1981) *Wee Sing AND PLAY*. Los Angeles: Price Stern Sloan, p. 19. "The Hokey-Pokey" の歌詞は次の通りである。

You put your right hand in.
You put your right hand out.
You put your right hand in
And shake it all about.
You do the hokey-pokey,
And you turn yourself around.
That's what it's all about!

- | | |
|-------------------|----------------|
| 2. Left hand | 7. Right hip |
| 3. Right foot | 8. Left hip |
| 4. Left foot | 9. Head |
| 5. Right shoulder | 10. Whole self |
| 6. Left shoulder | |

参考文献

- 大阪府河内長野市立天野小学校 (編) 『教科「英語」と国際理解教育』
東京都文京区立誠之小学校 (編) (2001) 『総合的な学習「国際理解・英語活動」の具体的な展開』東京: 小学館
永井淳子・粕谷恭子 (著)、久埜百合 (監修) (2000) 『うたって遊ぼう 小学生の英語の歌』東京: 小学館
三木 徹 (2002) 『授業指導案作成を通じた児童英語指導者育成の試み』『大谷女子大学紀要』第 36 号、pp. 20-35.
文部科学省 (2001) 『小学校英語活動実践の手引』東京: 開隆堂
Beall, Pamela Conn. & Nipp, Susan Hagen. (1981) *Wee Sing AND PLAY*. Los Angeles: Price Stern Sloan.
Moon, Jayne. (2000) *Children Learning English*. Oxford: Macmillan Heinemann.
Nakamoto, Mikiko. (2001) "Self-esteem in EFL Childhood Education-A Pilot Study to Foster Children's Self-esteem." *JASTEC Journal*, No. 20, pp. 9-26.